

上北島塚ノ本遺跡

福岡県筑後市大字上北島字塚ノ本所在遺跡の調査
筑後市文化財調査報告書
第31集



2001

筑後市教育委員会

序

筑後平野の中央部、矢部川中流域北岸に位置する筑後市は、古代より水稻耕作の適地として開発が進み、また、交通の要衝として多くの人々が往来することにより歴史を刻んできました。

上北島塚ノ本遺跡の発掘調査は、宅地造成に伴い平成11年度に実施されたものであります。上北島地区は裏山遺跡、狐塚遺跡などの著名な遺跡が点在し、水田天満宮を中心に発展を続けてきた、市内でも古い歴史に彩られた地域のひとつであります。今回の調査においても、この地域の歴史の深さを物語る成果を得ることができました。

今回の調査では開発者である飛鳥コーポレーションより多大なご協力を得ることができました。また、周辺児童の通学路に当たることから、地域の水田小学校、並びに保護者・地域の方々からも安全確保に関し、多大なご協力を得ました。皆様にはこの場を借りて御礼を申し上げます。

末尾に、本書が文化財保護への理解を深める一助となり、併せて研究資料としてご活用いただければ幸いです。

平成13年3月

筑後市教育委員会

教育長　牟田口　和良

例　　言

1. 本書は、宅地造成事業に伴い飛鳥コーポレーション（中富正徳）の依頼を受けて、筑後市教育委員会が平成11年度に大字上北島字塚ノ本において実施した埋蔵文化財の発掘調査報告書である。
2. 本書使用の遺構実測図は永見秀徳・立石真二・奥村太郎・下川可容子が制作し、浄書は立石がこれを行った。
3. 本書使用の遺物実測図は高田知恵、立石が制作し、浄書は立石がこれを行った。
4. 本書使用の写真は永見・立石が撮影した。
5. 本書使用の標高は海拔高であり、方位はG.N.である。
6. 本書に掲載した遺構の縮尺は1/40を基本とする。また、遺構の呼称については土壤をSK、溝状遺構をSD、柱穴をSP、不明土壤をSXと記号化した。
7. 本書に掲載した遺物の縮尺は土製品は1/3、石製品は1/2を基本とする。
8. 本書に使用した地図は建設省国土地理院長の承認を得て、同院発行の2万5千分の1地形図を複製したものである。
(Fig.3 : 承認番号　平 12九複、第 329号)
(Fig.4 : 承認番号　平 12九複、第 330号)
9. 本書の執筆、編集は立石がこれを行った。
10. 本書に関わる図面・写真・遺物などの資料は筑後市教育委員会で保管・管理され、今後公開・活用される予定である。

本文目次

第1章 はじめに

1 調査に至る経過	1
2 調査概要	2
3 調査組織	2

第2章 位置と環境

1 地理的環境	3
2 歴史的環境	3

第3章 遺構と遺物

1 基本層序	5
2 中世の遺構と遺物	6
3 古墳時代の遺構と遺物	11
4 繩文時代の遺構と遺物	14
5 流路状遺構	16
6 その他の土壙出土遺物	19
7 覆土採集の遺物	20

第4章 考察

1 周辺遺跡との関係	21
2 上北島塚ノ本遺跡の夜臼式土器について	21

挿図目次

Fig. 1 試掘トレンチ位置図 (S=1/2,500)	1
Fig. 2 試掘調査出土遺物 (S=1/3)	1
Fig. 3 築後市内埋蔵文化財発掘調査地点位置図 (2001年度版、S=1/2,500)	4
Fig. 4 上北島塚ノ本遺跡 位置図 (S=1/10,000)	5
Fig. 5 基本層序 (S=1/40)	5
Fig. 6 上北島塚ノ本遺跡 周辺地形図 (S=1/2,500)	6
Fig. 7 上北島塚ノ本遺跡 全体図 (1) (S=1/100)	7
Fig. 8 上北島塚ノ本遺跡 全体図 (2) (S=1/100)	8
Fig. 9 上北島塚ノ本遺跡 全体図 (3) (S=1/100)	9
Fig. 10 上北島塚ノ本遺跡 全体図 (4) (S=1/100)	10
Fig. 11 中世の土壙 (S=1/20)	11
Fig. 12 中世の遺物 (S=1/4)	12
Fig. 13 古墳時代の土壙 (S=1/40)	13
Fig. 14 古墳時代の遺物 (S=1/3)	13
Fig. 15 繩文時代の土壙 (S=1/40)	15
Fig. 16 繩文時代の遺物 (S=1/3)	16
Fig. 17 SD057・058土層断面図 (S=1/50)	17

Fig.18	SD055 (S=1/50)	18
Fig.19	その他の土壤出土遺物 (S=1/3)	19
Fig.20	覆土採集の遺物 (S=1/2・1/3)	20

表 目 次

Tab. 1 筑後市内埋蔵文化財発掘調査一覧表（2001年度追加分）.....	3
---	---

図 版 目 次

P.L.. 1	調査区全景（北から） 南側土壤群（北から）	P.L. 4	SD055（北東から） 出土遺物（1）
P.L. 2	SK018（北から） SK024（東から）	P.L. 5	出土遺物（2）
P.L. 3	SK039（北から） SK040（北から）		

第1章 はじめに

1 調査に至る経過

上北島塚ノ本遺跡は福岡県筑後市大字上北島字塚ノ本に所在し、筑後市の南西部に位置する。ここは矢部川とその支流により形成された微高地と三角州状低湿地が広がり、古代より豊かな水田の広がる穀倉地帯である。この一帯は旧下妻郡に属し、上北島は筑後市成立以前には水田村に属していた。調査区は旧水田村の中心地に近く、小学校や郵便局が近くに立地している。また、近年の道路整備にともない、市立病院や大型商業施設などへの交通の便も非常に良い地区となっている。ゆえにこの一帯では急速な宅地化が進み、従来の農耕地と住宅地が混在する景観が広がっている。

平成11年8月18日、飛鳥コーポレーション中富正徳（以後「甲」とする）より筑後市教育委員会社会教育課文化係（以後「乙」とする）に対し、大字上北島字塚ノ本に所在する水田に関して、宅地造成に伴う埋蔵文化財に関しての照会がなされた。試掘対象面積は $2,413\text{m}^2$ である。「乙」ではこれを受けて9月3日に試掘調査を実施した。しかしながらこの日はトレンチを2本開けたところで雨となり、作業は中止された。調査は秋雨も一段落し、表土が乾燥した10月2日に再開された。この日は3本のトレンチが開けられ、溜まり状土壤と土師器片が確認された。また覆土の中からも土師器や青磁の破片が採集された。これらの結果、「乙」ではこの地に遺跡が包蔵されていると判断した。

先の結果を受け、両者は協議を行った。この席で「甲」は対象地全面の調査費用の負担は不可能である旨を伝えてきた。そのため宅地部分に関しては分譲後、各地権者に対し遺跡の包蔵地であることを説明し、個々に対応を行うこととし、共用部分である道路部分に関してのみ発掘調査を行うこととなった。これにより調査対象面積は 660m^2 となった。両者は10月21日に発掘調査に関する契約を締結し、翌22日より11月20日を終了予定として調査を実施することとなった。



Fig. 1 試掘トレンチ位置図(S=1/2,500)

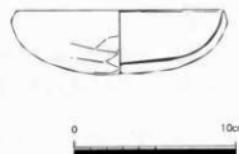


Fig. 2 試掘調査出土遺物 (S=1/3)

2 調査概要

調査はまず調査区とこれに面している道路とのあいだに木杭を打ち込み、ロープを張ることから始められた。これはこの道路が地域の小学校の通学路となっており、児童が安易に調査区へ立ち入らないようにするための方策である。次に工事計画図に沿って調査区を設定し、重機により表土および覆土の除去を行った。この作業の終了を受け、10月29日より作業用資材を搬入し作業員による遺構の検出を開始した。作業は遺構の確認後、半裁、土層図の制作と記録写真、完掘、遺構の記録写真と遺構図作成と同時にこれを行った。この間に周辺地域を測量中の久栄綜合コンサルタント(株)より調査区周辺の座標点について御教示を頂いた。調査は秋雨の時期と重なった為、降雨によりたびたび調査区が水没することとなった。「乙」は「甲」に対し若干の調査期間の延長を申し出たところ、「甲」は急ぎの工事であるにも関わらずこれを快諾して下さった。調査は11月17日に遺構の掘り下げを終了、19日に遺構の全体写真を撮影、22日には測量を終了し、22日から29日にかけて発掘資材の搬出を行い、調査を終了した。

3 調査組織

上北島塚ノ本遺跡の調査は、以下の体制で行われた。

調査主体	筑後市教育委員会				
教育長	牟田口和良				
教育部長	下川 雅晴				
社会教育課長	庄村 國義				
文化係長	田中 僚一（平成11年4月1日～平成12年3月31日） 成清 平和（平成12年4月1日～）				
文化財専門職	永見 秀徳（試掘・庶務担当） 小林 勇作 上村 英士				
文化財学芸員	柴田 剛 立石 真二（調査担当）				
調査作業 (50音順)	江崎トシ子	奥村 太郎	杣島美恵子	古賀 妙子	城崎マスヨ
	馬場 孝司	馬場千鶴子	平井 正芳	平尾 仁子	深町 順子
	深町スミ子	村上 幸子	村上美津子	本村 修一	森山美津子
整理補助員	平塚アケミ				
整理作業 (50音順)	徳永みどり	野口 晴香	野間口靖子	馬場 敦子	湯川 琴美
整理作業協力	横井 理絵				
	高田 知恵				

また、調査・整理作業に際して以下の方々・機関からの御教示、御指導や御援助を賜わった。ここに記して謝意を表したい。（順不同、敬称略）

小田 和利（福岡県教育庁南筑後教育事務所）、大塚 恵治（八女市教育委員会）、下川可容子（太宰府市教育委員会）、水田小学校児童保護者一同、水田小学校教職員一同、久栄綜合コンサルタント(株)、中央開発、飛鳥コーポレーション中富正徳、印刷のP&P

第2章 位置と環境

1 地理的環境

筑後市は福岡県の南西部、筑後平野の中央部に位置する。地域をJR鹿児島本線と国道209号線が縦断し、国道442号線が横断する。また、市南部には一級河川の矢部川、中央部には山ノ井川や花宗川、北部には倉目川が西流する。市北部には耳納山地から派生した八女丘陵が西に延び、灌漑用の溜池が点在する。低位扇状地である東部や低地である南西部には農業水路が発達している。当市は県内有数の農業地帯であり、北部の丘陵地域では果樹園や茶畠、東部や南西部では米麦中心の田園地帯が広がる。市街地は国道に沿って、市の中央部に形成されている。

2 歴史的環境

上北島塚ノ本遺跡の周辺には学史的にも著名な狐塚遺跡、弥生時代・古墳時代の集落跡である上北島平塚遺跡などが主要な遺跡として存在する。その他の遺跡に関しては『長崎坊田遺跡』(筑後市教育委員会、1999)の付図及び一覧表を、新規のものに関しては以下の表と次項の地図を参照していただきたい。

遺跡名	所在地	調査年	調査の時代・性質(特記事項)	文庫No.
134 古島埋蔵遺跡(第2次調査)	古島字安崎	1998年05月	縄文～弥生：(満)	
135 羽大塚ノ本遺跡	羽大塚字外船	1998年05月～06月	近世：集落(満)	第24集
136 古島埋蔵遺跡(第3次調査)	古島字安崎	1998年05月～06月	縄文～弥生、集落(竪穴式住居など)	
137 水田上平塚遺跡(第1次調査)	水田字上平塚石	1998年07月	弥生：集落(土標など)、中世(満など)	
138 水田下平塚遺跡	水田字下平塚石	1998年09月～10月	弥生：集落(クリーク)	
139 志田添通跡	志字添添	1998年09月～10月	古墳：(土標など)	
140 上北島井川口遺跡(第2次調査)	上北島字井川口	1998年09月～10月	確認調査(古墳)	
141 水田上仁長塚遺跡(第1次調査)	水田字上仁長塚	1998年09月～10月	中世：集落(戸門、満など)	
142 鶴田東牛ヶ池遺跡(第1次調査)	鶴田字東牛ヶ池	1998年09月～10月	縄文：(ビットなど)	
143 水田上平塚遺跡(第2次調査)	水田字上平塚石	1998年10月～11月	弥生：集落(土標)、中世：(満)	
144 鶴田東牛ヶ池遺跡(第2次調査)	鶴田字東牛ヶ池	1998年10月～11月	縄文～弥生墓集：(竪穴式住居、土塁など)	
145 水田上長塚遺跡(第2次調査)	水田字上長塚	1998年11月	中世～近世：集落(満、土塁など)	
146 鶴田牛ヶ池遺跡(第1次調査)	鶴田字牛ヶ池	1998年11月～12月	縄文：(火など)	
147 鶴田牛ヶ池遺跡(第2次調査)	鶴田字牛ヶ池	1998年11月～1999年02月	古代住遺	
148 山ノ井川口遺跡	山ノ井川口	1998年11月～1999年02月	弥生～中世：(古代住遺、満など)	
149 水田上平塚遺跡(第3次調査)	水田字上平塚石	1998年12月	弥生：(腰壁)	
150 鶴田牛ヶ池遺跡	鶴田字牛ヶ池／角	1998年12月～1999年02月	古代～中世：(窑場、土標など)	
151 鶴田西牛ヶ池遺跡	鶴田字西牛ヶ池	1998年12月～1999年03月	縄文：(竪穴式住居など)	
152 鶴田牛ヶ池遺跡(第3次調査)	鶴田字牛ヶ池	1999年02月	縄文：(ビットなど)	
153 鶴田牛ヶ池遺跡(第4次調査)	鶴田字牛ヶ池	1999年02月～03月	縄文～古墳：集落(竪穴式住居、豪庭など)	
154 常甫田日田遺跡(第3次調査)	常甫字田日田	1999年02月～03月	弥生：中世：集落(満、土標など)	
162 鶴田牛ヶ池遺跡(第5次調査)	鶴田字牛ヶ池	1999年04月	縄文：(石組炉伊など)、奈良～平安：(満)	
163 耳納山崎遺跡	津字安崎	1999年05月	奈良～平安、中世、近世：集落(満、土標など)	
164 鶴野原遺跡	鶴野字堤堰	1999年07月～08月	奈良：集落(竪穴式住居など)	
165 上北島花桜遺跡(第2次調査)	上北島字花桜	1999年07月～09月	弥生～古墳、中世、近世：集落(満、土標など)	第28集
166 上北島ノ本遺跡	上北島字ノ本	1999年10月～11月	縄文～弥生、中世：(満、土標など)	第31集
167 鶴野山ノ本遺跡	鶴野字山ノ前	2000年02月～03月	中世～近世(川跡)	

Tab.1 筑後市内埋蔵文化財発掘調査一覧表(2001年度追加分)

参考文献

- 筑後市史編さん委員会・編 『筑後市史』
小林 勇作 『長崎坊田遺跡』

- 筑後市史編さん委員会
筑後市教育委員会 1998
1999

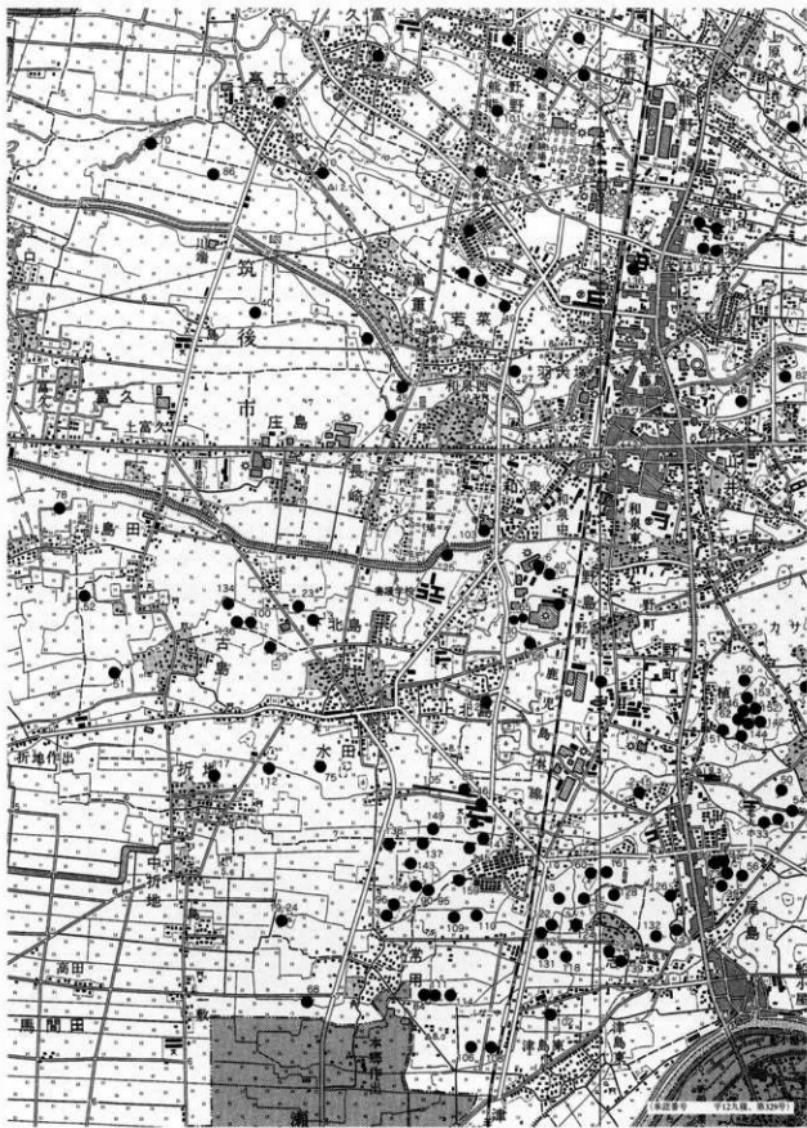


Fig. 3 筑後市内埋蔵文化財発掘調査地点位置図（2001年度版、S=1/25,000）

第3章 遺構と遺物

1 基本層序 (Fig. 4 ~ 6)

筑後市の地質は大きく分けると丘陵部の洪積層とその他の沖積層とに大別される。沖積層は市東部の低位扇状地と南西部の海性粘土を主体とする低湿地帯とに大別されるが、当遺跡は後者の低湿地帯に位置している。遺跡周辺の地名には「島」や「崎」、「江」といったものが多くあり、この一帯の元来の地形が「潟」のような平坦な湿地ではなく、三角州状の起伏に富んだものであったことを窺わせる。

今回の調査区は南北に長く、調査区南側は上部に黄橙色のローム土を乗せた高台となっている。このローム土はあまり堆積しておらず、数センチから十数センチで海性の石灰色～青灰色の粘土へと変化する。調査区を北へ進むと遺構面は徐々に低くなり、砂疊層から石灰色の海性粘土へと変化する。この一帯は旧河川であつたらしく、腐植土と思われる黒色粘質土層より下は砂疊層と粘土層が交互に堆積する。このあたりは7.2~7.3mの間で青灰色の砂層へと変化する。この層は湧水層である。

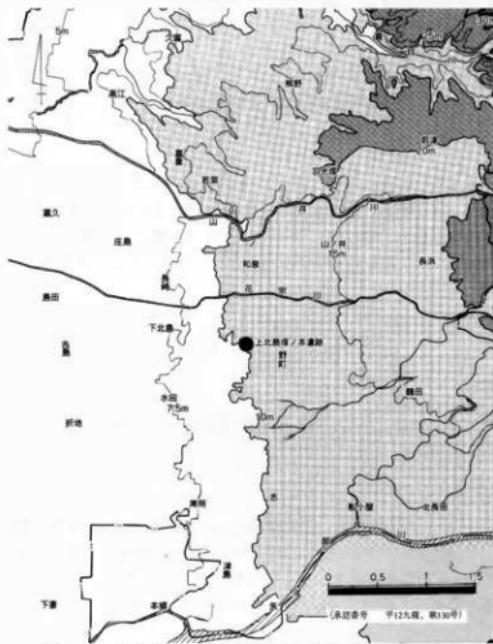
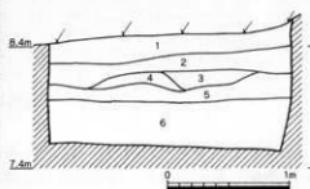
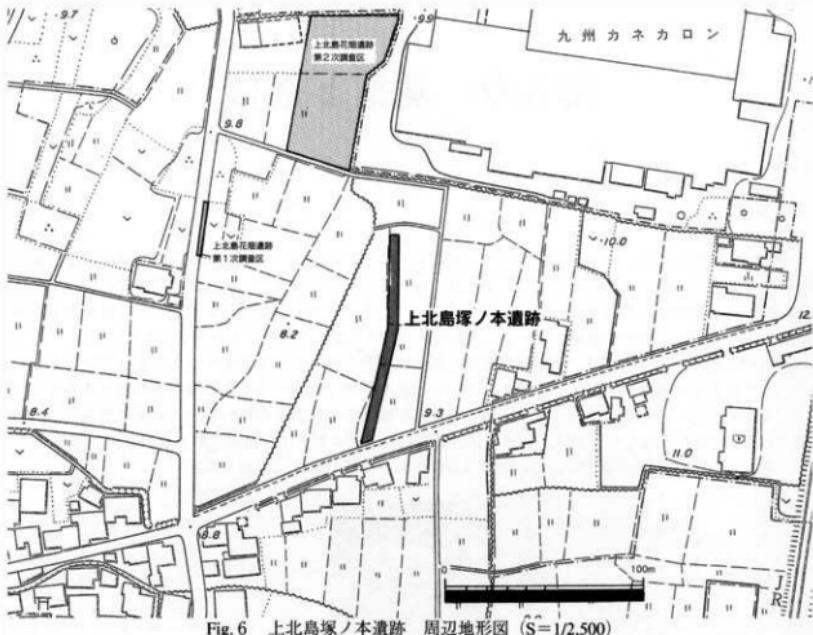


Fig. 4 上北島塚ノ本遺跡位置図 (1) ($S = 1/50,000$)



1 淡茶色土
2 褐色土
3 黒褐色土
4 暗灰色土
5 黒色粘土
6 青灰色砂

Fig. 5 基本層序 ($S = 1/40$)



遺構の多くは調査区南側の高台から検出された。その大半が「溜まり状土壙」と呼ばれる遺構プランの不明確なものである。時期的には古墳初頭、縄文晚期の遺物を出土しているが、その多くが遺物を共伴せず、時期不明のものである。このほかには中世の土壙が確認された。一方、北側では遺構の量は少なく、水路状の溝が2条確認された。この部分には最近まで実際に水路が存在していたとのことである。このほかには小水路を1条検出された。

2 中世の遺構と遺物 (Fig.11)

中世の遺構は調査区南側において2基の土壙が確認された。中世の土壙は他のものと異なり褐色系の粘土が主体となっており、比較的検出は容易であった。

SK037 (Fig.11)

E/F-7/8グリッドから検出された小土壙である。長軸約0.87m、短軸約0.72m、深さ約0.16m。主軸の傾きはN-46°-Wを測る。不定形プランを呈し、2段掘りがなされた土壙である。埋土は粘質土を主体とするが、東西方向から交互に土が流入しており、人為的な埋没をしたものと判断される。

この土壙からは土師器が採集されたが細片であり、図化するには至らなかった。器種なども不明である。

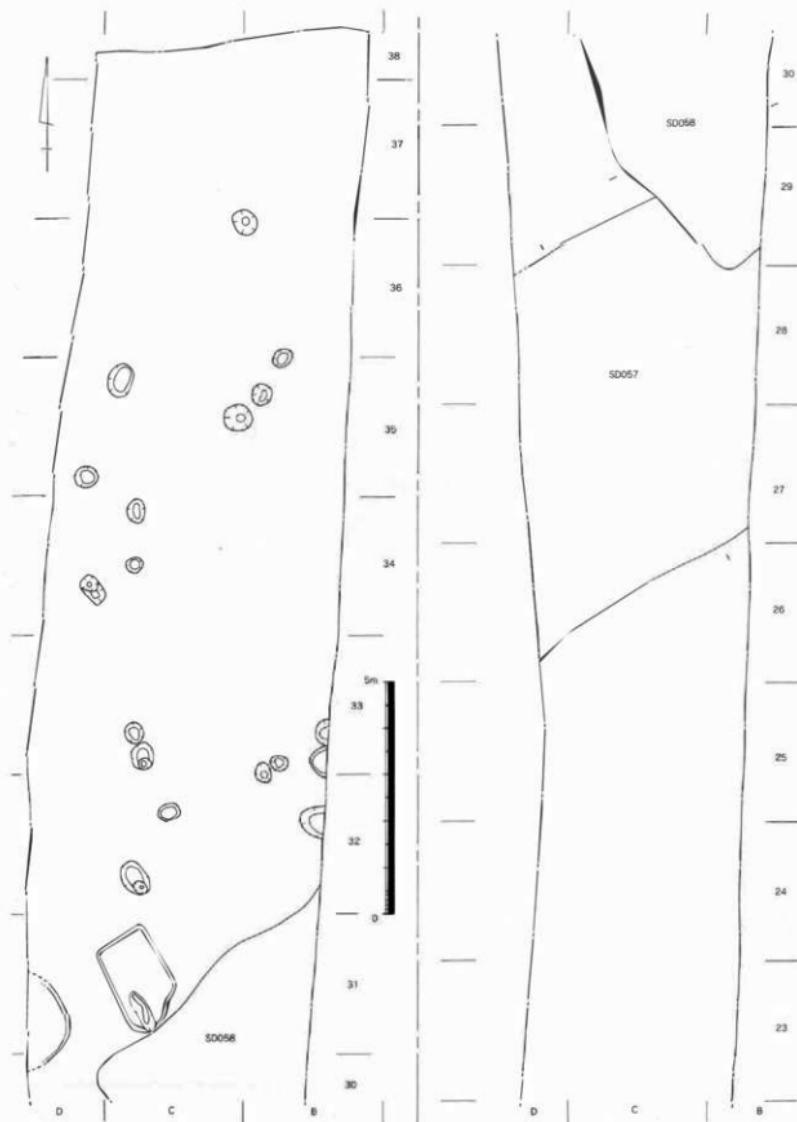
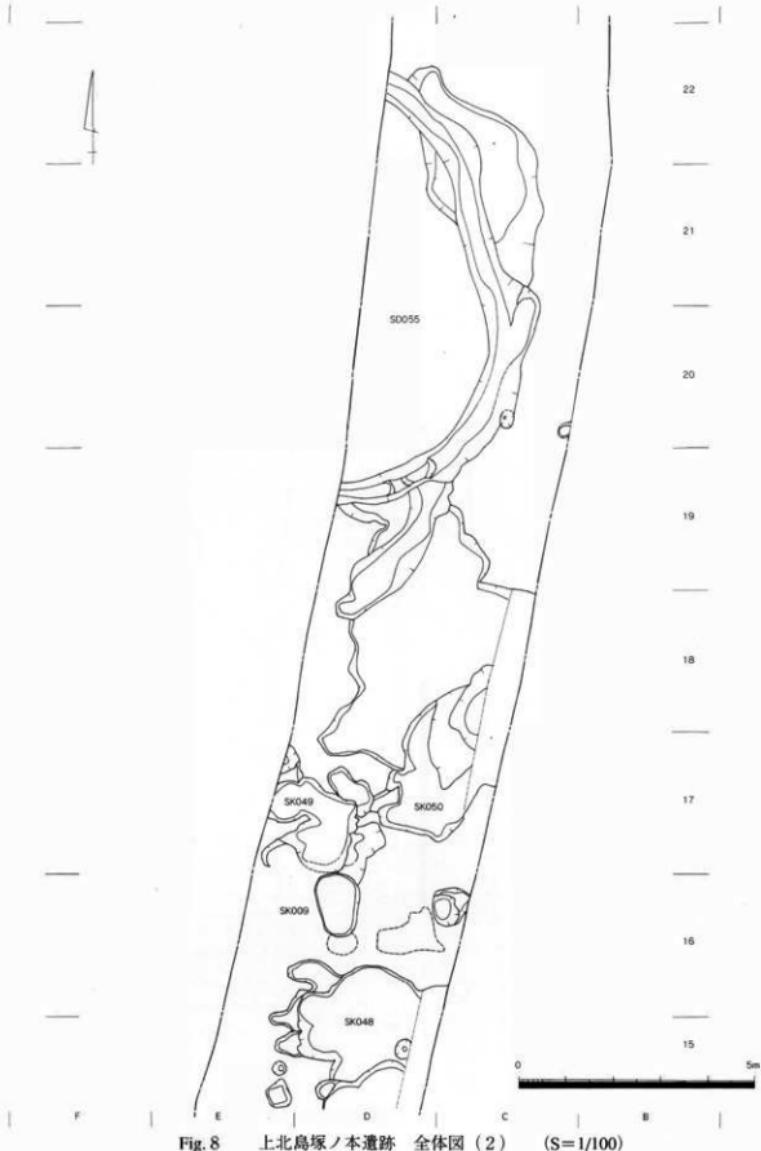
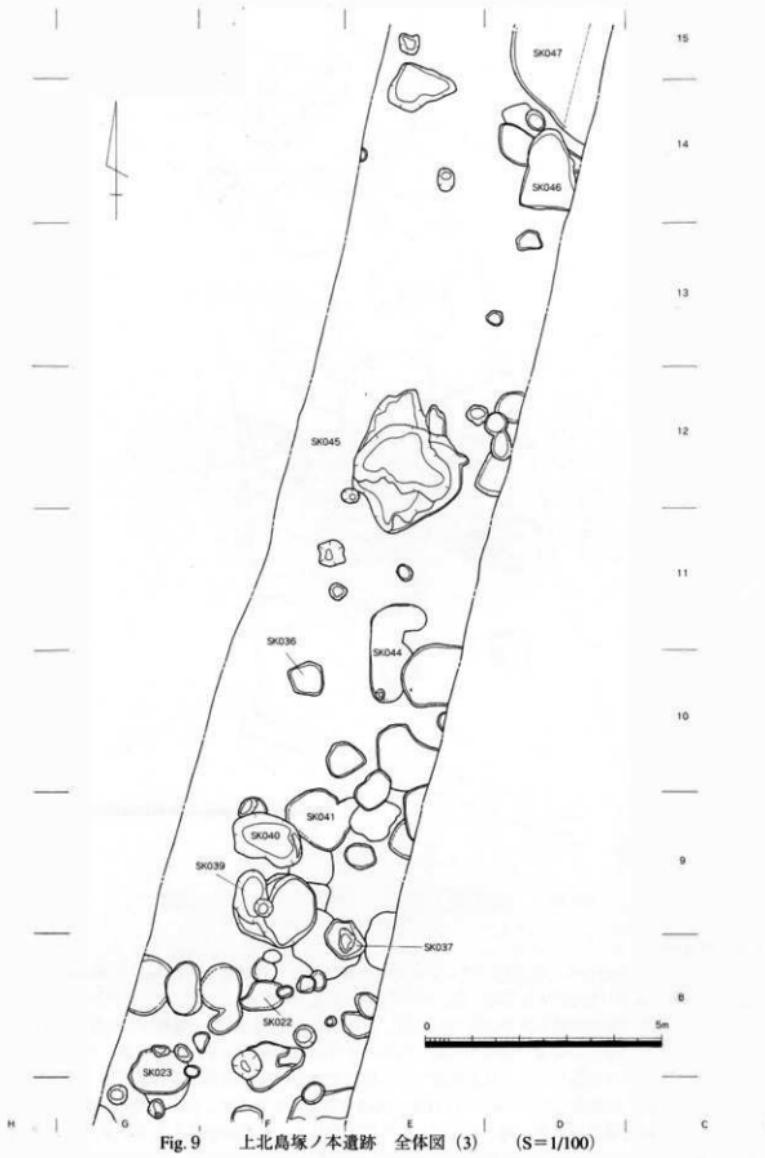


Fig.7 上北島塚ノ本遺跡 全体図(1) (S=1/100)



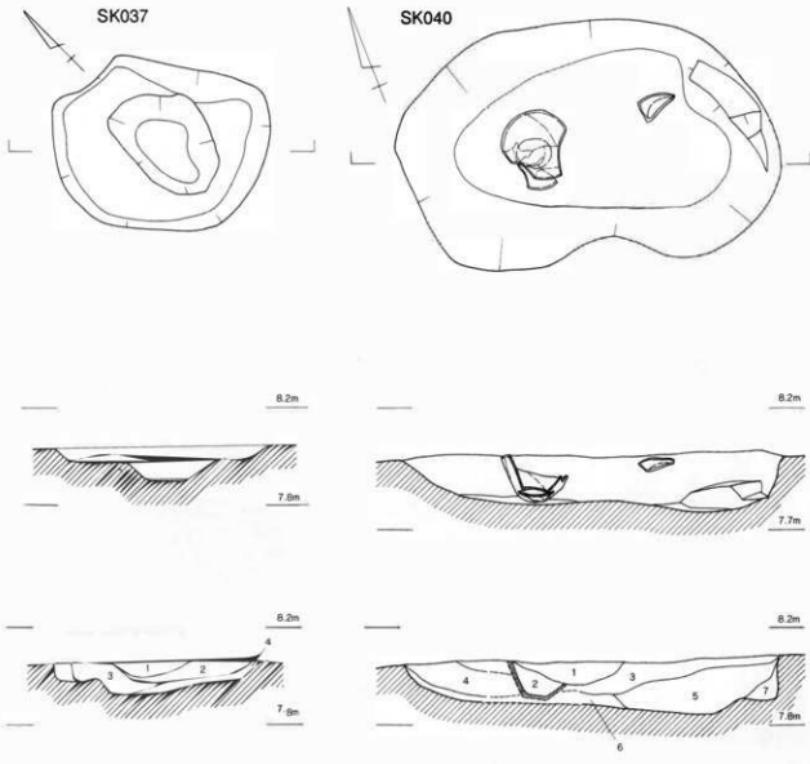




SK040 (Fig.11)

F-9グリットから検出された不定形プランを有する土壤である。長軸短軸約1.58m、短軸約0.98m、深さ約0.25m。主軸の傾きはN-69°-Wを測る。埋土の状況から人為的な埋め戻しがされたものと思われる。

この土壤からは瓦質の擂鉢を出土した (Fig.12)。1は最も遺存状況の良い個体で、口縁部を1/3ほど欠損する。山村分類におけるA-III-a類に当たる。成形は丁寧に施されている。使用に伴い内面のすり目の残りは薄く、底部ではかろうじてそれと判断できる状況である。2は底部のみの破片で、成形は粗い印象を受ける。使用痕は発達していない。3は1/3～1/6ほど遺存する個体で、山村分類のA-III-a類にあたる。内面の壁面や外部底面にハケ目が施されており、外部壁面にも一部痕跡が見られる。すり目の残り具合も良く、あまり使用されないうちに廃棄されたものと思われる。



SK037

- 1 暗灰茶色粘質土
- 2 暗灰茶色粘質土（1層より暗、粘質強）
- 3 暗灰茶色粘質土（暗茶色粘土ブロック多）
- 4 暗灰茶色粘質土（2層より黒色強）

SK040

- 1 暗灰色粘土
- 2 暗灰色粘土（1層より明）
- 3 暗茶色粘土
- 4 暗茶色粘土（3層より茶色強）
- 5 暗灰色粘土（灰色粘土ブロック多）
- 6 暗灰色粘土（灰色粘土混入）
- 7 灰色粘土

Fig.11 中世の土壤 (S=1/20)

これらの遺物は15世紀頃の所産と考えられる。

3 古墳時代の遺構と遺物 (Fig.13・14)

古墳時代の遺構は当遺跡が弥生終末期の遺跡として著名な狐塚遺跡と近接し、試掘調査においても古式土師器の壺の胴部破片が採集されたことから、その関連性が考えられていた。しかしながら該当時期

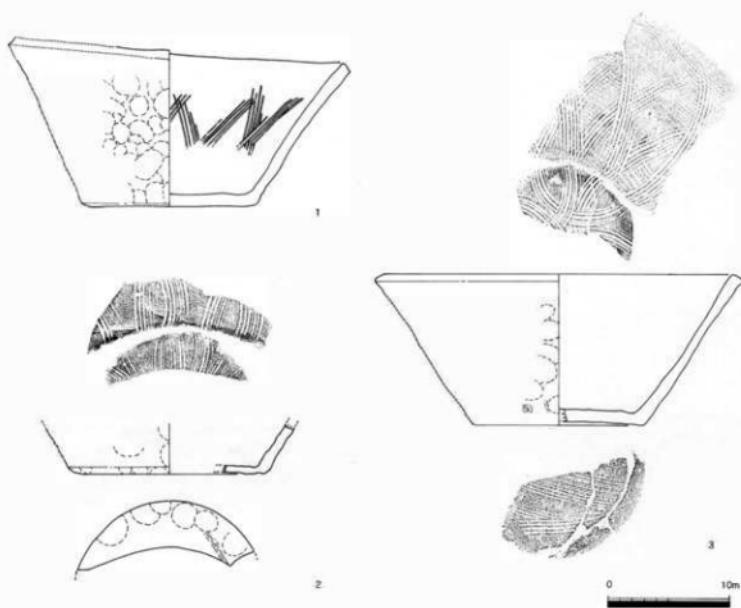


Fig.12 中世土壤出土遺物 (S=1/4)

の遺構や遺物は少なかった。

SK013 (Fig. 13)

F-6グリットから検出されたほぼ楕円形を呈する小土壤である。長軸約0.97m、短軸約0.70m、深さ約0.13m。主軸の傾きはほぼ東西方向に測る。

この遺構からは土師器の甕が出土した(Fig.14)。2は頸部から胴部にかけての破片で、1は口縁部の破片である。両者とも磨減が激しく調整などは不明であるが、器形からおおよそ5世紀代のものと思われる。

SK014 (Fig.13)

F-6グリットから検出された土壤で、北東部分をSK013に切られている。長軸約0.78m、短軸約0.66m、深さ約0.13m。主軸の傾きをほぼ東西方向に持つ。元来は楕円形の土壤であったと考えられる。

この遺構からは古式土師器の破片が採集されたが細片であり、図化しえなかった。

SK016 (Fig.13)

G-6グリットから検出された不定形の土壤である。長軸約0.86m、短軸約0.52m、深さ約0.13m。主軸の傾きはN-72°-Eを測る。埋土の状況から、自然埋没だと考えられる。

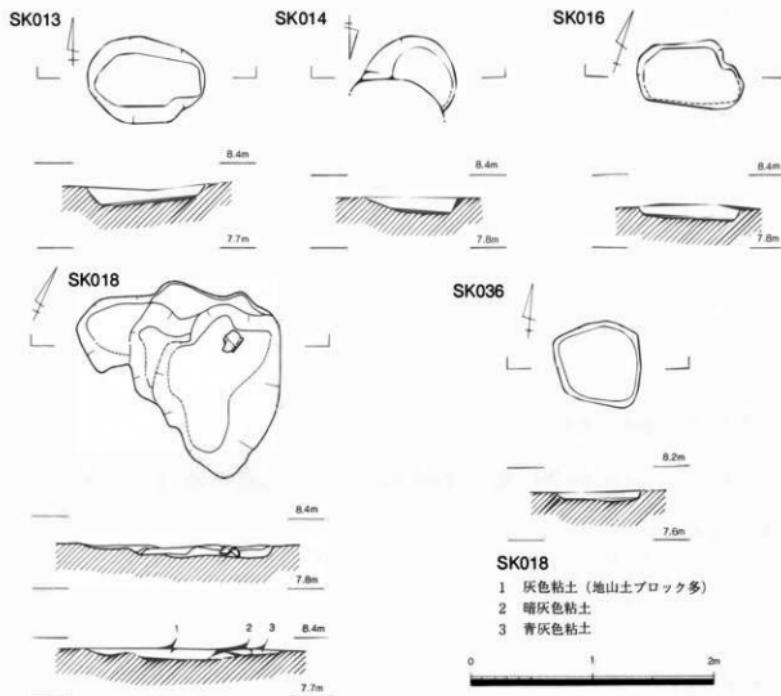


Fig.13 古墳時代の土壤 (S=1/40)

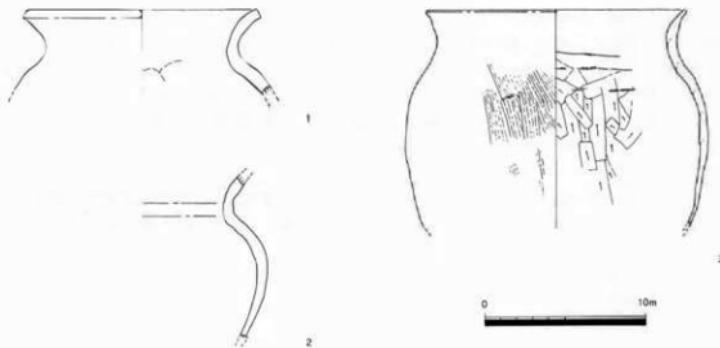


Fig.14 古墳時代の遺物 (S=1/3)

この遺構からは古式土師器が採集されたが細片であり、図化しえなかった。

SK018 (Fig.13)

F/G-7 グリットから検出された不定形の土壙である。底部が3段となっており、別の土壙が切りあつた感があるが、検出時点では分離できなかった。長軸約1.68m、短軸約1.47m、深さ約0.08m。主軸の傾きはN-67°-Eを測る。埋土状況から、自然埋没をしたものと思われる。

この土壙からは土師器が出土した (Fig.14-3)。風化により傷んではいるが、口縁部付近には煤の付着が認められる。内面調整は粗雑で、内面には粘土紐の接合痕がみられる。この土師器は5世紀代の所産と考えられる。

SK036 (Fig.13)

F-10グリットから検出された隅丸方形の小土壙である。長軸約0.70m、短軸約0.70m、深さ約0.07m。主軸の傾きはN-85°-Eを測る。

この土壙からは古式土師器が採集されたが細片であり、図化しえなかった。

4 繩文時代の遺構と遺物

今回の調査ではいくつかの土壙から縄文土器が採集された。これらは縄文晩期の夜臼式土器である。

SK023 (Fig.15)

G-7/8 グリットから検出された楕円形の土壙で、一部を小ピットに切られている。長軸約1.28m、短軸約0.95m、深さ約0.10m。主軸の傾きはN-85°-Eを測る。

この土壙からは縄文晩期の甕の胴部破片が採集された (Fig.16-1)。全体に風化が進んでいるが、胴部上半で屈曲し、屈局部に刻目が施されている。

SK024 (Fig.15)

F-5 グリットから検出された土壙である。今回の調査では遺構の一部のみの調査であり、残りの部分は調査区の東側へと広がる。土壙は検出部分では隅丸台形の土壙で、中央が一段下がっている。長軸(南北軸)約1.85m、短軸(東西軸)約1.17m、深さ約0.13mを測る。

この土壙からは縄文晩期の甕が2点出土した (Fig. 16)。2は口縁部の破片で、胴部の屈曲は見られない。胴部と口唇部にそれぞれ1条の突帯が巡らされており、刻目が施されている。胴部の突帯の上部には1条の沈線が巡らされている。刻目は粗雑で突帯部分からはみ出すほどであり、山ノ寺式の施文方法に類似する。外面は煤の付着が著しい。3は底部から胴部にかけての破片であり、表面には条痕文が施されている。外面には火受けによる変色や煤が、内面には炭化物の付着が見られる。

SK025 (Fig.15)

F-5 グリットから検出された楕円形を呈すると思われる土壙である。現存で長軸約1.40m、短軸約1.20m、深さ約0.18m。主軸の傾きはN-71°-Wを測る。この遺構からは夜臼式土器が検出されたが、その直下に径約0.30m、深さ約0.36mのピットが検出された。

この遺構からは縄文時代晩期の甕が出土した (Fig.16)。4は夜臼式土器の甕の底部破片である。風化が進み調整など不明な部分が多いが、内面には帯状の褐色に変色した部位が見られる。

SK039 (Fig.15)

F-9 グリットから検出された不定形土壙である。長軸約1.75m、短軸約1.53m、深さ約0.10m。主軸の傾

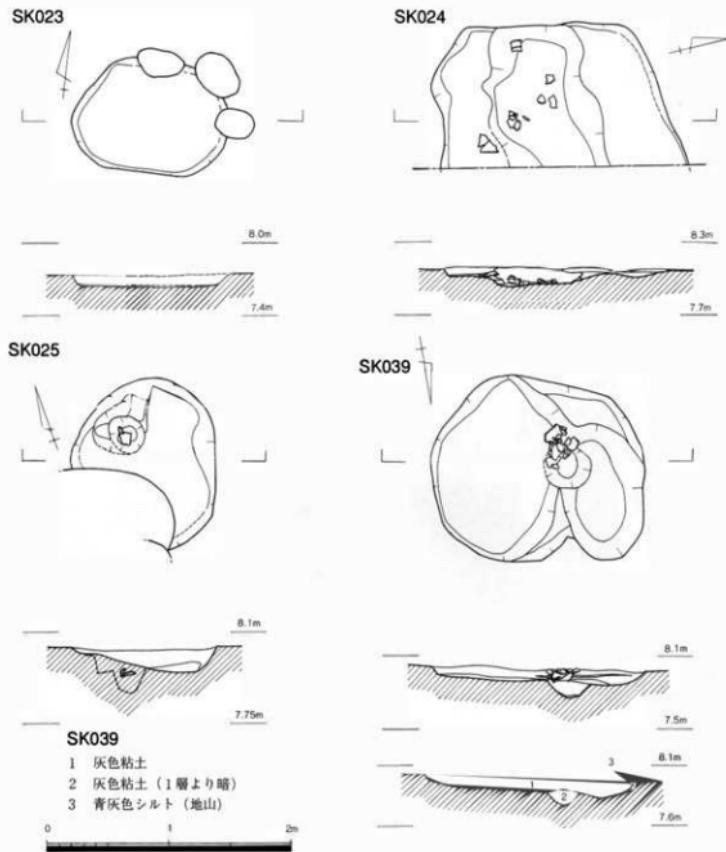
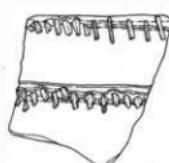
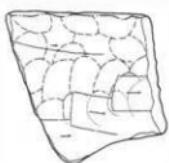


Fig.15 縄文時代の土壤 (S=1/40)

きはN-80°-Wを測る。この遺構からは夜臼式土器が検出されたが、取り上げ後、長径約0.40m、短径約0.35m、深さ約0.24mほどのピットが確認された。埋土状況から、人為的に埋め戻された可能性が残る土壤である。

この遺構からは縄文晩期の土器が検出された (Fig.16)。5は夜臼式土器の甕の口縁部で胴部上半で「く」の字に屈曲するタイプである。口唇部と屈局部に突帯が巡らされ刻目が施されており、6と同一個体である可能性もあるが、風化が激しく判然としない為、別個体として取り上げた。6は夜臼式土器の甕であり、口縁部を一部欠損している。胴部上半が「く」の字に屈曲するタイプで口唇部と屈局部に突帯を巡らし刻目を施している。風化が激しいが外面には若干の煤の付着が認められる。

SK024



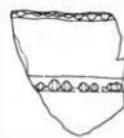
2

SK023

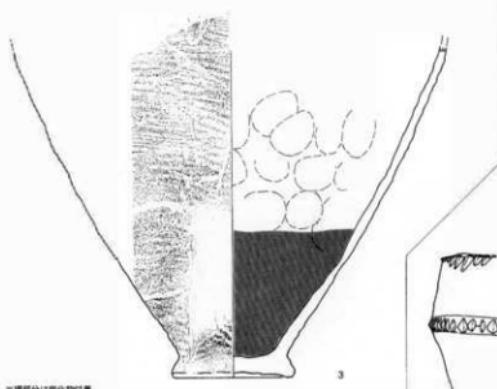


10cm

SK039

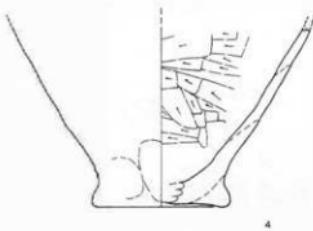


5

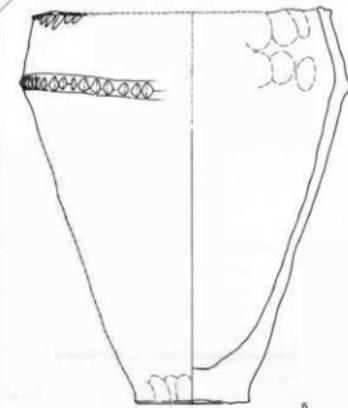


※縦部分は炭化物付着

SK025



4



6

Fig.16 縄文時代の遺物 (S=1/3)

5 流路状遺構

調査区の北側では砂礫層となり、ここが旧河川であったことを窺わせる。その一部分に黒色腐植土による2条の溝状遺構を確認した。地域の方々の話によるとこの位置には昔、用水路があったとのことであり、この遺構がそれであろうと判断した。この遺構に対しても、調査期間などの制約もあり、トレーニングによる埋土の堆積状況の確認に止めた。

SD057 (Fig.7・17)

東北東から西南西に走る幅約7.30m、深さ約0.80mの流路である。上層部分には小さな掘込み、下層部分には湧き水に伴うと見られる不正合層（13層）なども見られるが、基本的には自然堆積による埋土であり、最下層（8層）では植物遺体が特に多く見られる。埋土状況から最低1回の掘り直しがなされたものと思われる。

この遺構からは、遺物の出土は無かった。

SD058 (Fig.7・17)

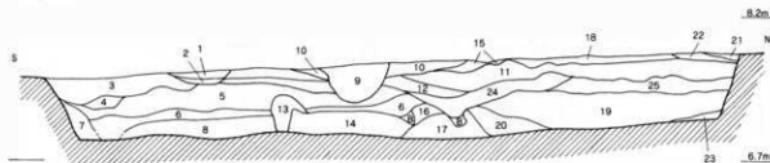
東北方向からSD057に合流すると思われる遺構である。調査区の関係から、全体の幅などは不明であるが、深さは約0.50mほどと思われる。埋土状況から、自然堆積による埋没後、1層が掘り込まれた可能性が考えられる。植物遺体に関しては、埋土全体に見られた。

この遺構からの遺物の出土は無かった。

SD055 (Fig.18)

C/D-19～22グリットから検出された弧を描くような小水路である。河川堆積により形成されたシルト層上に掘り込まれておらず、幅約0.90m、深さ約0.2mを測る。埋土は粘土層→シルト層と変化しており、自然堆積によるものと判断した。

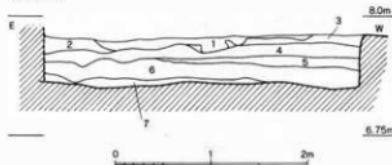
SD057



SD057

1 暗灰色シルト	8 黒茶色粘土（植物遺体多）	14 黒茶色粘土	20 黒色粘土
2 暗灰色シルト（上層より砂粒多い）	9 黒茶色粘土（炭化物少量含）	15 黒色粘土	21 茶色砂
3 茶灰色砂	10 黒茶色シルト	16 黒色粘土	22 黒色粘土
4 黒灰色シルト（砂粒粗）	11 黒茶色粘土	17 黒茶色粘土	23 黑茶色シルト
5 黒灰色粘土	12 灰色粘土	18 黒灰色粘土	24 黑灰色粘土
6 青灰色シルト	13 黑灰色シルト	19 暗黒茶色粘土	25 暗灰色シルト
7 黒色粘土			

SD058



SD058

1 茶色砂	5 暗灰色粘土
2 黒色シルト	6 黒色粘土
3 黒色粘土	7 青灰色シルト（地山）
4 黑灰色粘土	

Fig.17 SD 057・058土層断面図 (S=1/50)

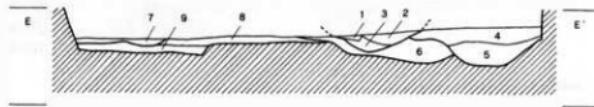
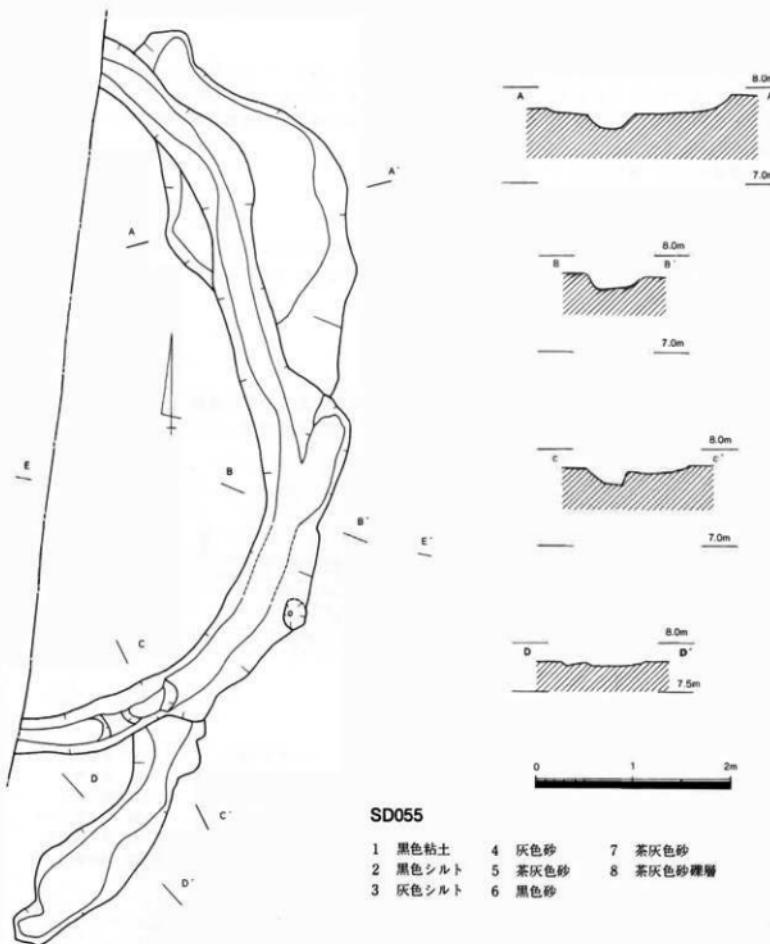


Fig.18 SD055 ($S=1/50$)

この遺構からは遺物の出土はなかったが、遺構の脇にこれに伴うと見られる木枕が検出された。風化が激しく取り上げるには至らなかつたが、この遺構に時期を与える上でひとつの参考になるものと思われる。

6 その他の土壤出土遺物 (Fig.19)

今回の調査ではこのほかの土壤から多くの遺物が採取された。しかしながらその多くが細片であつたり、層位的な発掘がなされていない済まり状土壤からの出土であった。ここではそれらの遺物のうち、実測したものをお掲載する。

- 1は半透明黒曜石の有脚鏡である。SK002出土。床面付近からの出土らしいが、確認していない。
- 2はサヌカイトの剥片である。SK049出土。削器として利用されたものか。
- 3～6はSK045からの出土である。3は施釉陶器の小皿の底部破片で、緑灰釉を施し全体に貫入が発達している。底面には糸切り痕が発達している。4は土師器の小皿破片である。5は須恵器の鉢の口縁部破片で、口唇部に灰かぶりによる自然釉が見られる。6は土師器の甕の口縁部破片である。全体に風化が激しく、時期の特定に至るものではない。
- 7・8はSK050からの出土である。7は弥生土器でいわゆる「亀ノ甲タイプ」と呼ばれているものだが、内面調整や口縁部の突堤の状況など、夜白式土器に通じるものもある。8は縄文土器の甕の底部で、風化が著しい。

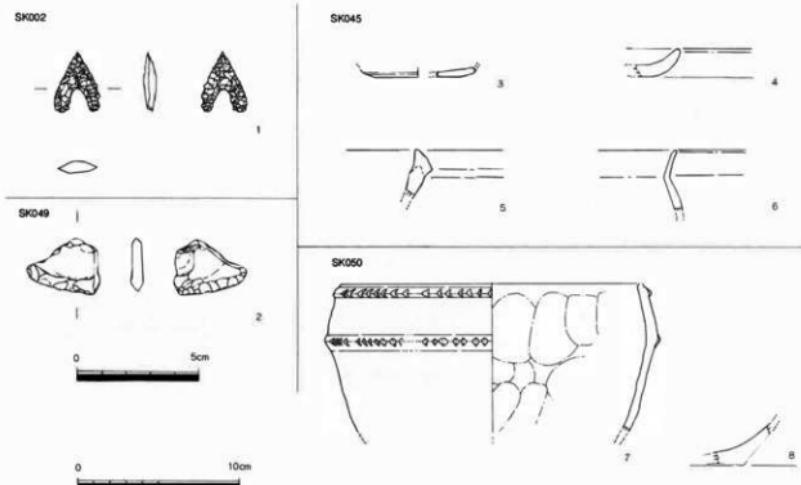


Fig.19 その他の土壤出土遺物 (S=1/2・1/3)

7 覆土採集の遺物 (Fig.20)

今回の調査では調査区南側の高台部分を覆っていた覆土から、多くの遺物が採集された。その多くが瓦質の捕鉢や青磁の碗である。1はサスカイト製の石鏃だが、磨滅が激しく、剥離状況の観察などは出来ない。2・3は縄文晚期の甕の底部である。4～8は瓦質土器の捕鉢の細片、9は土鍋の口縁部細片である。10～12は青磁碗の破片である。10は龍泉窯系で横田・森田分類のI-5-b類、11も龍泉窯系のもので内面にキノコ状紋が1つ見られる。横田・森田分類におけるI-4類の亜種か。

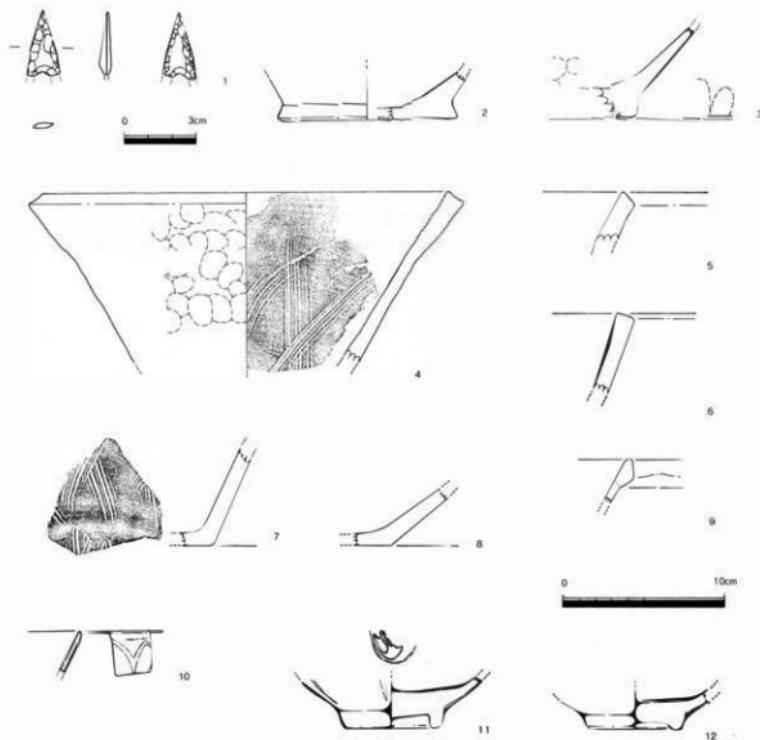


Fig.20 覆土採集の遺物 (S=1/2・1/3)

【参考文献】

山村一信著

横田賢次郎・森田 勉

「太宰府出土の瓦質土器」

「太宰府の輸入陶磁器について」

「中近世土器の基礎研究 VI」

「太宰府陶磁器研究」

日本中世土器研究会

1990

1995

第4章 考察

1 周辺遺跡との関係

上北島塚ノ本遺跡周辺では、いくつかの埋蔵文化財発掘調査が行われている（Fig.3・Tab.1参照）。しかしながら、今回の調査によって得られた資料と同時期の遺物を出土した遺跡は現時点まででは報告されていない。今回の調査は上北島地域の埋蔵文化財の分布状況に新たな情報を与えてくれた。しかしながら、周辺地域は上北島花畠遺跡第2次調査の報告にもあるように、かなりの削平を受けているものと考えられる。このため遺跡の広がりを考える上では現地形はあまり参考に出来ず材料が少ない。今後、周辺での調査事例の増加が待たれるところである。

2 上北島塚ノ本遺跡の夜臼式土器について

筑後市内において夜臼式土器の報告がなされたのは1970年刊行の『狐塚遺跡』中の「常用遺跡」が初見である（注1）。その後市内での圃場整備事業に伴い、夜臼式土器の出土例は市の南方、常用遺跡群を中心に増加している。現在報告されているものは、前述の常用遺跡、梅島遺跡第2次調査区、久恵今町遺跡の出土資料である。このうち梅島遺跡、久恵今町の資料は夜臼新段階の資料である。常用遺跡出土資料に關しても新段階の資料と捉えてよさそうである。

今回、上北島塚ノ本遺跡で得られた夜臼式土器の資料のうちSK024出土遺物（Fig.16）のうち2は山ノ寺式土器に見られる深い刻目が施され、3は外面に条痕を持つ。これらは夜臼古段階の時期のものといえる。一方、SK025・039出土遺物（Fig.16-4～6）は条痕は見られず、刻目も浅いことから夜臼新段階のものと言えよう。また、SX050出土遺物（Fig.19-7）は夜臼系統の突帯が口縁部より1段下がった部分に施されており、亀ノ甲出現期のものと似通った特徴を有している。

今回得られた資料はこの地域における縄文晩期後半から弥生時代前期への土器変遷を考える上で参考となりうるものである。しかしながら少数の破片資料ばかりであり、同時期の土器の器形などを明らかにするものではない。今後の資料の増加が待たれるところである。

（注1） 「『狐塚遺跡』の中で報告されている常用遺跡は現在では、その明確な場所は不明となっている。しかしながら、報告書の地図と現在の地図を照らし合わせると、遺跡地は現在の常用日田行遺跡付近に位置している。

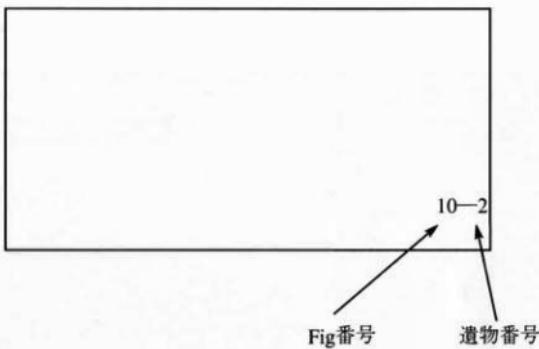
【参考文献】

小田富士雄	「付録－1 常用遺跡」（『狐塚遺跡』）	筑後市教育委員会	1970
小林 勇作	『長崎坊田遺跡』	筑後市教育委員会	1999
水見 秀徳	『筑後市内における弥生文化』（『菊池川・八女地方の古代を考える交流会』資料）	筑後市教育委員会	2000
小林 勇作	『上北島花畠遺跡』	筑後市教育委員会	2000
上村 英士	『Ⅲ・（2）久恵今町遺跡』（『筑後東部地区遺跡群Ⅳ』）	筑後市教育委員会	2000
水見 秀徳	『Ⅲ・9 梅島遺跡（第2次調査）の調査』（『筑後西部地区遺跡群Ⅱ』）	筑後市教育委員会	2000

P L A T E

凡 例

遺物写真右下の番号は、以下のとおりである。



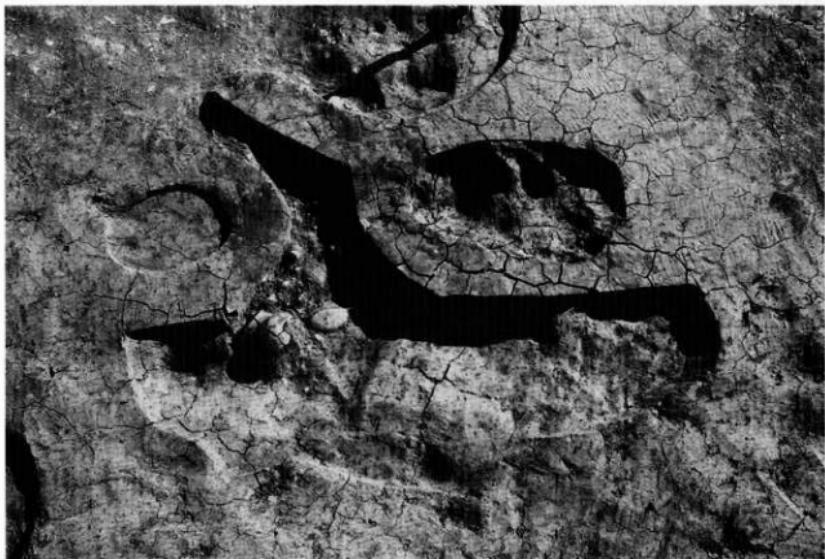
PL.1



調査区全景（北から）



南側土壤群（北から）



SKO18(北から)



SKO24(東から)

PL.3



SKO39 (東から)



SKO40(北から)



SDO55 (北東から)

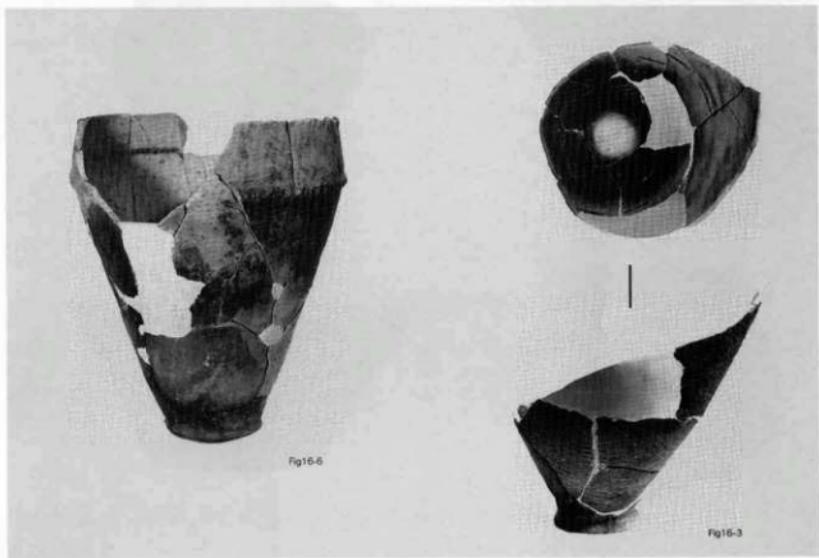


Fig16-6

Fig16-3

出土遺物（1）



Fig16-2



Fig16-4



Fig19-7



Fig12-1



Fig14-3

上北島塚ノ本遺跡

筑後市文化財調査報告書・第31集

平成13年3月31日

発行 筑後市教育委員会

福岡県筑後市大字山ノ井898

0942(53)4111

印刷 株式会社西日本新聞印刷